

ツォンカパにおける無自性論証と正理

、四津谷 孝 道

I

縁起を通して、実体的な有 (sat) に対する執着《有見》或いは絶対的な無 (asat) に対する執着《無見》のいずれの執着にも陥ることなく、「空」に徹していくことが、中観思想の特徴の一つである。しかし、そのような中観思想も、自らが克服した《有見》或いは《無見》にすぐさま傾斜してゆく危険性を、常に自らの中に潜ませている。たとえば、縁起を通して得られた諸存在の「無自性」・「空」そのものが逆に実体化、更には絶対化され、或いは「無自性」・「空」に徹するあまり、実体的なものだけに止まらず、我々が真理を考究する際の依拠となるものまでもが否定されてしまうという危険性が、中観思想には常に潜在しているのである。ツォンカパ Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419) は、この問題に鋭い分析力をもって取り組んだ中観思想家の一人である。

ツォンカパが明確に自らの中観思想を展開し始めたのは、『菩提道次第論広本』 (*Lam rim chen mo*, 略号 LR) からと考えられる。中でも「毘鉢奢那 (vipaśanā) 章」における「無自性」論証に関する彼の記述は、非常に興味深いものである。しかし、LRにおけるこの「無自性」論証に関するツォンカパの論述は、後の著作『善説心髓』 (*Legs bshad snying po*, 略号 LN) 並びに『正理海』 (*Rigs pa'i rgya mtsho*, 略号 RG) のそれに関する論述を待ってはじめて説得力のあるものとなると考えられる。筆者はここにツォンカパの「無自性」論証における発展があることを認めるのである。

本稿では、まず「無自性」論証において重要な役割を果たす正理 (yukti) とは何かを検討し、次に LR と RG におけるツォンカパの「無

自性」論証を比較し、その発展において正理がどのような役割を果たしているかを検討してみたい。

II

“yukti” (rigs [pa]) という語には、「結合」、「準備」、「適用」、「適当」等の多様な用法があるが、ここで検討するのは、一般に「正理」と訳されるもの、つまり「道理」或いは「論理」といわれるものであり、論書等において聖教 (āgama, lung) と共に自らの主張を根拠づける手段の一つである所のものである。

ここでは、様々な「正理」の用法が散見できるLRの「毘鉢奢那章」に焦点を当て、我々の脈絡の中で重要と思われる「正理」の用法を列挙してみたい。¹⁾

ツォンカパによれば、正理には正しい正理とそうでない正理がある。前者は、「無垢の正理」 (rigs pa dri ma med pa)、「勝れた正理」 (rigs pa dam pa, 392b5)、或いは「中観派、或いは中観論者の正理」 (dbu ma pa'i rigs pa, 364a5, 409b4) と称されるもので、仏教内外の实在論者 (bhāva-vādin, vastu-vādin, dngos por smra ba) 並びに中観自立派 (Svātantrika-Madhyamaka)²⁾ が措定する実体的な存在を否定する論理と考えられる。一方、後者は、「疑似正理」 (rigs pa ltar snang, 365b6) と称され、上述の実体的な存在を措定する仏教内外の実体論者の論理であると考えられる。(尚、以下においては単に「正理」と言った場合は、「無垢な正理」等の正しい正理を示す。)

正理とは、次に列挙するそのほとんどの用例が示すように、勝義レベルで考察するもの、言い換えれば、勝義的な対象、或いは対象が勝義として成立するか否かを考察するものである。(以下においては、“rigs pa” という表現の中に “rigs shes” という表現も含まれる。)

gcig tha dad dpyod pa'i rigs pa (ある二つの対象が [勝義として] 同一であるか、或いは全く別異かを考察する) (353b5-6, 453b5-6)

mthar thug dpyod pa'i rigs pa （究極、即ち勝義を考察する）
 (363b1)

tshul bzhin du dpyod pa'i rigs pa （対象を如理に考察する）（364
 a2-3, 376b6, 404a2）

'thad pas bsgrub pa'i rigs pa （合理によって証明される正理）
 (466a1)

de nyid [la] dpyod pa'i rigs pa （真実を考察する）（347b3, 363
 b3, 366a2, 366a3, 380b2）

de kho na la dpyod pa'i rigs pa （〃）（364b2, 365a4）

de kho na nyid la dpyod pa'i rigs pa （〃）（363b1, 363b3-4,
 366a6, 376b6, 380b4, 404a4）

de kho na nyid du grub pa ma grub dpyod pa'i rigs pa （対象が
 真実として成立するか否かを考察する）（347b1）

don dam gtan la 'bebs pa'i rigs pa （勝義を決断する）（367a5,
 367a6）

rang gi ngo bos grub pa yin min rigs pas dpyod （対象が自体に
 よって成立するか否かを考察する）（378a2）

rang bzhin yod med dpyod pa'i rigs pa （対象に自性が有るか否
 かを考察する）（364b2, 364b3-4, 364b5, 364b6, 365a2, 374a6,
 378a5-6, 399b3, 409a1-2, 434b6, 438a6, 448a6, 448b3）

rang bzhin yod med tshul bzhin [du] dpyod pa'i rigs pa （対象
 に自性が有るか否かを如理考察する）（376b6, 377b3, 377b4, 377
 b6, 412b2）

yin tshul dpyod pa'i rigs pa （対象の〔真実としての〕あり方を考
 察する）（400a3, 404a4, 434a3, 444a2）

tshul bzhin du dpyod pa'i rigs pa （対象を如理に考察する）（363
 b1, 364a3-4, 404a2）

rang bzhin yod med tshol ba'i rigs pa （対象に自性が有るか否か
 を探る）（367a1-2, 438a5, 448a4-5, 449a3, 453b1, 453b6）

rang bzhin 'gog pa'i rigs pa （自性を否定する）（349b4, 353a4,

354b1-2, 354b4, 354b6, 355a1, 357a2, 376b1, 410a3)

rang bzhin yod pa 'gog pa'i rihs pa (対象に自性が有ることを否定する) (363a3-4, 460b5)

rang gi ngo bos grub pa 'gog pa'i rigs pa (自体によって成立するものを否定する) (356a1)

bdag skye 'gog pa'i rigs pa (自らより生じることを否定する) (457a1)

gzhan skye 'gog pa'i rigs pa (他より生じることを否定する) (442a5)

このような“rigs pa”という語は様々な動詞表現と結びついて、以下のような用法を示すことが確認される。

- 1) 対象が正理の考察・検討に耐える (正理による考察・検討に耐えるものとは、後述するように、正理による考察の対象ではないことを意味するが、正理による考察・検討に耐えないものが必ずしも正理によって否定されるとは限らない。)

rigs pa + dpyod [kyis] [mi] bzod (正理による考察に耐える或いは耐えない) (347b3, 347b4, 363a5, 363b1-2, 363b2, 363b3, 363b6, 365a1, 378a3, 378a6, 380b2-3, 380b4, 404a4, 412b6, 418b4, 444a2-3, 444a3)

rigs pa + brtag bzod (347b1-2, 416a2)

- 2) 対象がこの正理によって得られる・成立する・措定される (後述するように、対象が正理によって得られた (=成立する等) からといって、それが必ずしも勝義として、或いは真理として存在することわけではない。)

rigs pa + (ma or mi) rnyed pa (363b4, 363b6, 364a1, 364a2, 364a3, 364a3-4, 364a5, 364b3, 364b5, 364b6, 365a2, 366a1, 378a2, 378a3, 378a4, 400a3, 438a2, 438a6, 438b1-2, 445b6, 453b1, 453b6, 471a4, 479b6) cf. 378a5

rigs pa+[mi] 'grub pa (363b6-364a1, 364a1, 374a6, 377b6, 409a2, 409a3, 434b6, 438a6, 448a4, 453b1)
 rigs pa+grub pa (364a1, 377b5)
 rigs pa+'jog pa (412b2, 438a1-2)

3) 対象が正理によって証明（＝論証）・決択（＝決定）される

rigs pa+bsgrub pa (391b6, 392b6, 408b4)
 rigs pa+nges pa (412a5, 448a3)
 rigs pa+gtan la 'bebs pa (353b6, 460b5)

4) 対象が正理によって否定される（「正理によって否定される」とは、対象が勝義として、或いは真実として成立しないことを意味する。）

rigs pa+'gegs pa (bkag pa, dgag pa) ('gegs pa: 356a1-2, bkag pa: 349b4, 353a4, 357a2, 362b3, 363a5, 367a2, 416a2, 449b4, 479b6, dgag pa: 354b4, 357a4, 364b4, 365b4, 376a2, 379a3, 380a3, 392b6-393a1, 426a5, 448b3, 449b1, 457a1)
 rigs pa'i dgag bya (391a4, 391a6, 410a3, 450b3, 467a2)
 rigs pa+phar la bkag pa (410a3)
 rigs pa+[mi or ma] khegs pa (347b1, 363b2, 363b6, 364a1, 364a2, 364a4-5, 365a5, 366a1, 378a3, 379b5, 409a3, 416b4, 438a6, 448a6, 449a4, 453b1, 457a1)
 rigs pa+phar la mi khegs (365a5)
 rigs pa+[mi] 'gog pa (348a6, 354b4, 354b6-355a1, 355a1, 357a2, 363a3-4, 363b3, 364a3, 365b4, 366a2, 366a3, 367a1, 367b4, 375a6, 379a5, 379b4, 379b5, 380a4, 381a4, 382b5, 383b4, 383b6, 393a1, 412b6, 454a1)
 rigs pa+[mi] gnod pa (363b2, 364b5, 367a5, 376a3, 376a3-4, 377b4, 377b5, 377b6)
 rigs pa+gnod pa [mi] 'bab pa (376b6, 377b3)
 rigs pa+gnod byed (445b6)
 rigs pa+gsil ba (449b2-3)

rigs pa + sun 'byin pa (363a5, 367a6, 367b6, 379a5, 380a3, 393a2, 471a4)

rigs pa + sel (412b5, 412b5-6)

rigs pa + rnam bcad pa (448b1)

rigs pa'i mtshon gyis bshig (475b2)

III

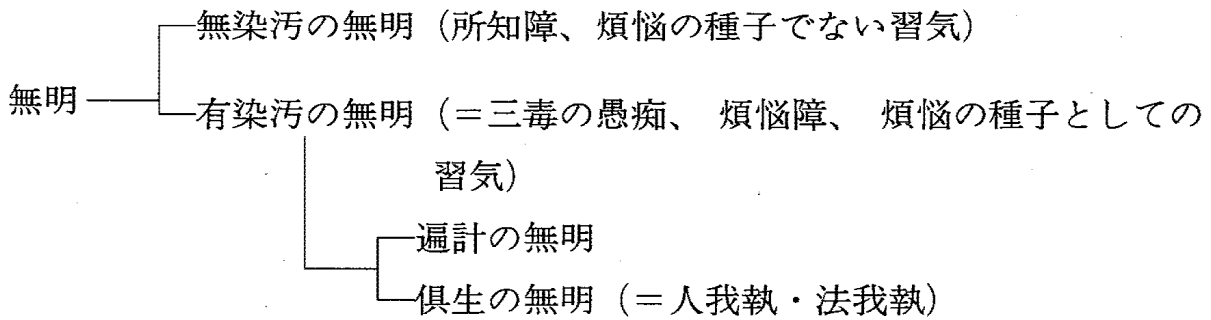
次に、正理によって否定される対象³⁾とそれを措定する知について述べてみたい。

正理とは、前述のように、実体的なもの、即ち《諦有》を否定するものであるが、その《諦有》を設定するものは、《諦執》(bden [yod par] 'dzin [pa]) と呼ばれる執着である。この《諦執》は、色・声等の諸存在に対して自己同一的な実体性を不当に付与 (=《増益》) する無明 (avidyā, ma rig pa) のことである⁴⁾。では、この無明 (=《諦執》) とは如何なるものであろうか。⁵⁾

ツォンカパにおいては、無明は「《無染汚》の無明」と「《有染汚》の無明」とに分けられる。前者は、煩惱の種子ではないところの習気であり、⁶⁾ 知に顯現 (snang [ba]) が生じる原因であるところの⁷⁾ 「所知障」(jñeya-āvaraṇa, shes bya'i sgrib pa) である。⁸⁾ 後者は、いわゆる三毒と呼ばれるものの一つである「愚痴」(moha, gti mug) と同義で、⁹⁾ 煩惱の種子としての習気であると考えられる。また、この「《有染汚》の無明」は「生来 (=《俱生》) (lhan skyes) の無明」と「後天的 (=《遍計》) (kun brtags) な無明」との二種類に分けられる。¹⁰⁾ 「《遍計》の無明」は、仏教徒あるいは非仏教徒の学説論者 (grub mtha' smra ba) にのみ有るもので、この無明によって誤って構想されたものとしては、常住、唯一、主宰的なアートマン、空間的に無部分な極微 (=所取) と時間的に分割されない知 (=能取) のない自己認識 (=自証知)、根本原因 (=pradhāna)、自在天 (=īśvara) 等が挙げられる。¹¹⁾ 一方、「《俱生》の無明」は、¹²⁾ 十二支縁起の第一支の無明のことであり、¹³⁾ 「煩惱障」(kleśa-āvaraṇa, nyon mongs kyi sgrib pa) のことである。そして、それは世

俗諦を措定するものであり、¹⁴⁾ 有情を輪廻に結びつける根本的な原因なのである。¹⁵⁾ 更に、この「《俱生》の無明」は二我執、即ち人我執（gang zag gi bdag 'dzin=gang zag la bden 'dzin）と法我執（chos kyi bdag 'dzin=chos la bden 'dzin）なのでもある。¹⁶⁾（→ 図1 参照）

（図1）



IV

正理の否定対象の中でも最も根本的なものは、有情を輪廻に結びつけるところの「人我執」と「法我執」であると考えられる。では、それら二つの我執の対象である「人」或いは「プドガラ」(pudgala, gang zag) 並びに「法」(dharma, chos) は正理によってどのように否定されるであろうか。

まず、「人我執」の対象である「プドガラ」に関しては、その成立が可能となる次のような七つの選言支が設定される。

- 1) プドガラと五蘊は同一である。
- 2) プドガラと五蘊は異なる。
- 3) プドガラが能依であり五蘊が所依である。
- 4) プドガラが所依で五蘊が能依である。
- 5) プドガラが五蘊を有する。
- 6) プドガラは五蘊が唯集積されたものである。
- 7) プドガラは五蘊がある特定の配列で結合したものである。¹⁷⁾

そして、これらのいずれの場合も「プドガラ (=人)」は存在し得ないことより導き出される結論が、「人無我」なのである。

また、法我に関してはその成立が可能となる次のような四つの選言支が設定される。

- 1) 諸存在は自らより生じる。
- 2) 諸存在は他より生じる。
- 3) 諸存在は自と他の両者より生じる。
- 4) 諸存在は原因なくして生じる。¹⁸⁾

そして、人无我の場合と同様に、これらのいずれの場合においても法我は存在し得ないことより導き出される結論が、「法無我」なのである。

V

では、つぎにLRとRGの間にみられるツォンカパの「無自性」論証の発展と、そこにおいて正理がどのような役割を果たしているか検討してみたい。

まず、LRで述べられた無自性論証における正理の役割について述べてみよう。

ツォンカパは (A) 「対象が正理による考察に耐えない」 (rigs pas dpyad mi bzod pa) とは (B) 「対象が正理によっては得られない」 (rigs pas ma rnyed pa) のことであるとする。¹⁹⁾ 更に、彼は後者を (C) 「対象が正理 [知] によって成立しない」 (rigs shes kyis mi 'grub pa) と同義とする。²⁰⁾ これら三つは、ツォンカパの無自性論証を理解する上において重要な概念であり、これら三つが同義とされていることが、LRにおける無自性論証の大きな特徴の一つである。

ツォンカパによれば、いかなる存在も正理の考察に耐えうるものではないのであるが、²¹⁾ この「対象が正理による考察に耐えないもの」には、二種類のものがあると考えられる。第一のものは、対象が正理による考察の範囲の内にあり、そしてそれは正理によって損なわれるもの (rigs pas gnod pa)、即ち正理による考察によって否定されるものなのである。これは、前述の《有垢なる正理》によって措定されたものであると考えられる。第二のものは、対象そのものが正理による考察の範囲の外にあるもの

で、正理による考察の対象とならないものである。つまり、正理が全く関与しないことによって、それは正理によって損なわれる（＝否定される）ことも肯定されることもないのである。²²⁾ このような正理による考察が加えられず、正理によって損なわれる（＝否定される）こともないのものは、さらに「通常の言説知」(tha snyad pa'i tshad ma) 或いは「言説の量」(tha snyad pa'i tshad ma)、即ち迷乱を生じさせる一時的な原因によって汚されていない明晰な感官知 ('phral gyi 'phrul ryus ma bslad pa'i dbang po gsal ba'i shes pa) によって措定されるものと、そうでないものの二種類に分けられる。前者は、しばしば“tsam”という語を付して、たとえば「単に存在するもの、《唯有》」(yod pa tsam)²³⁾ や「単に生じるもの、《唯生》」(skye ba tsam) 等のように表現されるものである《言説有》と、²⁴⁾ そして後者は《言説無》と称されるものである。（→図2参照）

(図2)

正理による考察に耐えないもの（＝正理によっては得られないもの、正理[知]によって成立しないもの）

└ 正理による考察の範囲の内にあり、正理によって損なわれる（＝否定される）もの

└ 正理による考察の範囲の外にあり、正理による考察が加えられず、従って正理によって損なわれることがないもの

└ 《言説有》—「通常の言説知」あるいは「言説の量」即ち迷乱を生じさせる一時的な原因によって汚されていない明晰な感官知によって措定されるもの²⁵⁾

└ 《言説無》—一時的な原因によって汚された感官知によって措定されるもの

LR において (A) 「正理による考察に耐えない」、(B) 「正理によって

は得られない」、そして (C) 「正理によって成立しない」の三つが同義とされたことは、ツォンカパが (A)' 「正理による考察に耐えるか否か」、(B)' 「正理によっては得られるか否か」、そして (C)' 「正理によって成立するか否か」の三つを同義と理解していたことを示すと考えられる。しかし、それに対しては次のような反論が予想される。「自性は確かに正理によって成立しないが、無自性は正理によって成立すると言えよう。それならば、無自性は正理による考察に耐えるもの、そして正理によって得られるものとなるのではないか。もしそうならば、無自性そのものが実体的なものとなってしまふであろう。」²⁶⁾ これは、上記の三概念 (A)', (B)', (C)' を同義と見なすことより論理的に当然予想される反論と考えられる。ツォンカパがこのような対論者からの反論を想定し、それに対して明確な答えを提示したのは、LRではなくRGにおいてなのである。RGにおいてツォンカパは、以下に示すように、LRにおいて自らが同義とみなした「正理によって得られること」と「正理による考察に耐える」という二つの概念を区別することによって、上記の反論をかわすのである。

まず、芽等が真実として (bden par) 有るか否かが検討され、[芽等が真実として存在しないと見られ] る。次に、[その] 「真実 [として] 存在しないこと (bden med) が正理知によって得られるから、再度 (slar) [それが] 真実として有るか否かが検討されるならば、[その芽等が] 真実として存在しないことは、[正理知によっては] 得られない (mi rnyed)。しかし、それ (=その芽等が真実として存在しないこと) が [全く] 得られなかった (ma rnyed pa) 訳ではない。一方、芽等が究極 (mthar thug) を考察する正理による考察によって耐えるものとして存在するか否かが検討される時も、[それらが、正理知による] 考察に耐えることは得られないのではある。そして、更に、[それらが] 正理知による] 考察に耐えないことまさにそれが、正理知による考察に耐えるものとして存在するか否かが検討される場合も、まさにそれ (=芽等が究極を考察する正理による考察によって耐えるものとして存在しないこと) は、[正理によって全く] 得られない (mi rnyed pa) ののである。従って、「正理知によって得られること」と「それ (正理知による考察) によって耐えること」の両者も同

[義] ではないのである。²⁷⁾

まず、「芽等が正理知によって真実として有るか否か」が検討される場合、それには次のようなプロセスが想定されている。

- 1) 芽等が真実として存在するか否かが正理によって考察される。
→ 芽等が真実として存在することは、正理によって得られない (mi rnyed)。即ち、芽等は真実としては存在しない (=無自性である)。
しかし、「芽等の無自性性」は正理によって全く得られなかった (ma rnyed) わけではない。
- 2) 更に、その「芽等の無自性性」が真実として存在するか否かが正理によって考察される。
→ その「芽等の無自性性」は、正理によって得られない。

次に、「芽等が正理による考察に耐えるものとして有るか否か」が検討される場合、それには次のようなプロセスが想定されている。

- 1) 芽等が正理による考察に耐えるものとして有るか否かが検討される。
→ 芽等は正理による考察に耐えるものではない。
- 2) 更に、その「芽等が正理による考察に耐えないこと」が正理による考察に耐えるものとして有るか否かが検討される。
→ その「芽等が正理による考察に耐えないこと」は、正理による考察に耐えない。

ここで重要なことは、前述のように、正理による考察に耐えるものは全くないのではあるが、あるものは正理によって得られることが有るということである。これは次のように解釈できよう。芽等の自性は、正理による考察に耐えるものでもなく、また正理によって得られるものでもない。一方、芽等の無自性性は勝義的には (=真実としては) 得られないが、言説的 (=世俗的) なものとしては得られると考えられる。そのような言説的なものは、前述のように正理による考察の領域に属さない (=正理による考察の対象ではない) ことより、正理による考察に耐えるものとしては

存在しない。しかし、芽等の自性が否定されることは、それらの無自性の肯定が無ければ成立しないことより²⁷⁾、芽等の無自性は正理によって得られなければならないはずである。このように理解すれば、無自性そのものは、正理による考察に耐えないけれども、それは正理によって非実体的（＝非勝義的）なものとして得られることより、正理によって否定されることもないのである。これが、ツォンカパによって「正理によって得られること」と「正理による考察に耐える」という二つの概念が同義とされない理由と考えられる。更に、それによって無自性そのものが実体的であることも回避されると考えられるのである。

VI

以上のように、「正理」(yukti, rigs pa) の働きを中心に、ツォンカパの「無自性」論証の発展の一過程を眺めたのであるが、その包括的な理解の為には、前述のように、正理による考察の対象とはならない言説（＝世俗）の世界をツォンカパがどのように捉えていたかを踏まえた上で、それを彼の勝義の世界についての理解とすり合わせる必要があると思われる。²⁸⁾ 何故ならば、その両者が重なった所こそが、「無自性」論証が展開される場と考えられるからである。ツォンカパが提示する言説の世界は非常に複雑であり、またここにも著作間における思想的発展が認められる。従って、各著作における彼の理解を整理し、それらを比較・検討することが重要と考えられる。その上で、後代のゲルク派の理解、そしてツォンカパと同時代以降の他学派よりの批判を検証することによって、ツォンカパの「無自性」論証、ひいては彼の思想全体に関する理解がより深まるのではないだろうか。

註

- 1) ツォンカパにおける「正理」に関しては、長尾[1978], pp. 130-132、Nappers [1989], p. 55-56 参照。
- 2) spyir ni dngos po rnam la don dam par rang bzhin yod par 'dod pa'i dngos por smra ba dang tha snyad du de dag (421a) la ran gi mtshan nyid kyis grub pa'i rang bzhin yod par 'dod pa'i rang rgyud pa gnyis ka yin

no // (LR. pa. 420b5-421a1)

訳) 一般には、[我々にとっての対論者 (phyi rgol) は、] 諸存在に自性を認める実在論者と言説 (=世俗) においてそれら (=諸存在) に自相によって成立する自性が有ると認める [中観] 自立派の両者である。

- 3) ツォンカパによれば、否定対象 (dgag bya) に実践的修行によるもの (lam gyi dgag bya) と正理によるもの (rigs pa'i dgag bya) があり、後者がより重要であるとされる。(LR. 391a4-b4)

- 4) phyi nang gi chos rnam rang gi mtshan nyid kyis grub par 'dzin pa'i rang bzhin sgro 'dogs pa'i blo ni &dir ma rig pa ste / (LR. pa. 393b1-2)

訳) [感覚器官の] 内外の諸法が自相によって成立すると捉える、[即ち] 自性を《増益》する知は、ここにおいては無明であり、.....

- 5) ツォンカパにおける「無明」に関しては、森山 [1994] 参照。

- 6) 習気には、以下に示されるように、煩惱の種子であるものとそうでないものの二種類があり、後者が「所知障」であるとされることより、前者は「煩惱障」と考えられる。

nyon mongs kyis sa bon la bag chags su bzhag pa (ma. 121a) cig dang /
nyon mongs kyis sa bon ma yin pa'i bag chags gnyis las shes sgrib tu 'jog
pa ni phyi ma ste / (GR. ma. 120b6-121a1)

訳) 煩惱の種子が習気として設定されるものと煩惱の種子ではない習気の二つがある中、所知障は後者 (=煩惱の種子ではない習気) であって、.....

- 7) nyon mongs pa'i bag chags rnam shes sgrib yin te / de'i 'bras bu gnyis snang 'khrul ba'i cha thams cad kyang der bsdu'o // (GR. 120b6)

訳) 諸々の煩惱の [種子の] 習気は「所知障」であり、その果である能取、所取の二つの顕現の迷乱なるもの全ての部分もそれ (=所知障) に含まれる。

- 8) 'o na 'di pa'i lugs la shes sgrib gang la byed snyam na / shes sgrib ni thog ma med pa nas rang bzhin yod par zhen pa'i dngos po la mngon par zhen pa'i sgro byed kyis sems rgyud la bag chags brtan (463a) par bzhag pa'i bag chags kyis dbang gis rang bzhin med bshin du rang bzhin yod par snang ba'i gnyis snang gi 'khrul ba rnam yin te / (LR. pa. 462b6-463a1)

訳) それならば、この派 (=帰謬派) における所知障とは、何を意味するのかというならば、[以下のような] 所知障とは、無始時来より「自性が有る」と[いう]存在に執着する《増益》によって心相続に習気が堅固に置かれるのである [が、その] 習気によって無自性にもかかわらず自性が有ると顕現する二顕現の迷乱なるものであって、.....

- 9) 'jug grel las kyang / 'dis sems can rnam ji ltar gnas pa'i dngos po lta ba la rmongs par byed pas na gti mug ste ma rig pa dngos po'i rang gi ngo

bo yod pa ma yin pa sgro 'dogs par byed pa rang bzhin mthong ba la sgrib
pa'i bdag nyid can ni kun rdzob bo zhes dang /..... (LR. pa. 394a4-5)

訳)『入中論』自注(略号、MABh)においても「これによって、諸々の有情があるがままの存在を見ることが妨げられるから、愚痴、即ち存在の自体がないものを[自体が有ると]《増益》し、自性(=存在の本質)を見ることが覆う性質を有する無明は世俗である。と.....

ツォンカパにおける「所知障」に関しては、小川[1988]参照。

de ltar gsungs pa'i gti mug ni dug gsum gyi ya gyal gyi gti mug ngos
'dzin pa'i skabs yin pas / nyon mongs can (90a) gyi ma rig pa yin
zhing /..... (GR. ma. 89b6-90a1)

訳) そのように説かれた「愚痴」とは、三毒の一つである愚痴[のことである]と理解されている箇所であるから、《有染汚》の無明であり、.....

- 10) 無明と同様に、《諦執》にも《遍計》と《俱生》の《諦執》が有ると考えられる。

de yang grub mtha' smra bas 'phral du kun brtags pa'i bden grub dang /
bden 'dzin ngos zin pa tsam gyis mi chog pa'i phyir / thog ma med pa nas
rjes su zhugs pa / grub mthas blo bsgyur ma bsgyur gnyis ga la yod pa'
i lhan skyes kyī bden 'dzin dang / des bzung ba'i bden grub legs par ngos
zin pa ni shin tu che ste / (GR. ma. 81a4-6)

訳) 更に、学説論者によって一時的に《遍計》された《諦成》と《諦執》を理解するだけでは十分ではないから、無始より随住するもの[と]学説によって慧(=知)が変革されている人と変革されていない人の両者に有る《俱生》の《諦執》と、それによって執されている《諦成》をよく知ることは非常に重要なのである。[何故ならば、].....

これら二種類の《諦執》は、《遍計》と《俱生》の無明に相応すると考えられる。

- 11) de la rang gzhan gyi sde pa dngos por smra ba rnams kyī 'dod pa thun
mong ma yin pas kun brtags pa'i gzung 'dzin cha med dang bdag dang
gtso bo dang dbang phyug pa rnams ni de dag gis rnam par 'jog pa na
(LR. pa. a1-2)

訳) そこにおいて自部(=仏教徒)と他部(=非仏教徒)の实在論者達の独自の説によって遍計された能取、所取という部分のないもの(自己認識=自証知)、アートマン、根本原因、そして自在天がそれら(=正理)によって設定されるとき、.....

- 12) ツォンカパは《俱生》の《諦執》(=無明)の対象の執着する六種類の様相を挙げている。

sngar bshad pa'i ming gi tha snyad kyī dbang tsam kyis bzhag pa min
pa'i yod par 'dzin pa ni / bden pa dang don dam par dang yang dag tu

grub pa dang / rang gi ngo bos dang rang gi mtshan nyid kyis dang rang
bzhin gyis yod par 'dzin pa lhan skyes yin la /..... (GR. ma. 88a1-2)

訳) 前述の名称という言説によってのみ設定されたのではない存在であると
執着することは、【1】諦、【2】勝義として、そして【3】真実として成立す
る、更に、【4】自体によって、【5】自相によって、【6】そして自性によっ
て有ると [する] 《俱生》の執着であるが、.....

ツォンカパによれば、自立派は上述の《諦執》の最初の三つの《諦執》
の対象は全く存在しないとされるのであるが、それ以外の三つの《諦執》
の対象は言説において認められるのである。

dbu ma rang rgyud pa rnam bden pa sogs gsum du grub pa shes bya
la mi srid par bzhed kyang / rang gi ngo bos grub pa sogs gsum ni tha
snyad du yod par bzhed de / (GR. ma. 88a3)

訳) 中観自立派の人々は、諦等の三つとして成立するものは、所知の [範
疇の中] にはあり得ないとお認めにならないけれども、自体によって成立
する等の三つは言説として有るとお認めになり、.....

- 13) de ltar dgag bya 'dzin pa'i log rtog mthar gtugs pa ni yan lag bcu gnyis
kyi dang po lhan (397a) cig skyes pa'i ma rig pa yin la (LR. pa. 396
b6-397a1)

訳) そのように否定対象に執着する究極的な誤った分別は、十二支の第一支
の《俱生》の無明なのであるが、.....

- 14) de ltar na srid pa'i yang lag gis yongs su bsdus pa nyon mongs pa can
gyi ma rig pa'i dbang gis kun rdzob kyi bden pa rnam par bzhag go shes
rten 'brel bcu gnyis kyi yang lag dang por bshad pas nyon mongs yin gyi
shes sgrib min no // (LR. pa. 394a5-6)

訳) そのようであるならば、「輪廻の [一] 支分とされた《有染汚》の無明に
よって世俗諦が設定されるのである。」というように、[その無明は、] 十二
縁起の第一支と説明されているから、[それは] 煩惱 [障] であって、所知
障ではないのである。

- 15) LRでは、「無明」と「有身見」のいずれが輪廻の根本であるかが問題と
されている。

de ltar ma rig pa 'khor ba'i rtsa ba yin na / 'jug pa dang tshig gsal du '
jig lta 'khor ba'i rsta bar bshad pa mi 'thad de gtso bo'i rgyu gnyis med
pa'i phyir ro zhe na /..... (LR. pa. 394a1-2)

訳) そのように、無明が輪廻の根本であるならば、『入中論』（略号、MA）
や『プラサンナパダー』（略号、PRP）において「有身見」が輪廻の根本と
説明されていることは相応しくない。何故ならば、主となる原因が二つ
[有ることは] 無いからである。と [対論者が] 云うならば

cf. RG では「有身見」が輪廻の根本であり (RG. ba.. 186a1)、あらゆる煩

悩の根本とも述べられている。(RG. ba. 190a3)

それに対するツォンカパの答えは、「無明」は一般的な総称であり「有身見」はその中の特殊なものであるから、[そこに] 矛盾は無いとする。

des na yan lag bcu (pa. 394b) gnyis kyi dang po'i ma rig pa 'di 'khor ba'i rtsa ba yin pa la 'jig lta yang 'khor ba'i rtsa ba yin par bshad pa ni ma rig pa spyi dang 'jig lta bye brag yin pas 'gal ba med do // (LR. pa. 394a6-b1)

訳) それ故に、十二支の第一支のこの「無明」は輪廻の根本であり、「有身見」も輪廻の根本であると説明するのは、無明が一般的なものであり、有身見が特殊なものであるから矛盾は無いのである。

- 16) de ni bdag tu sgro 'dogs pa yin la de yang chos kyi bdag tu sgro 'dogs pa dang gang zag gi bdag tu sgro 'dogs pa gnyis yin pas chos kyi bdag 'dzin dang gang zag gi bdag 'dzin gnyis ka ma rig pa yin no // (LR. pa. 394b2-3)

訳) それは、我と《増益》することであるが、それはまた、法我を《増益》することと人我を《増益》することの二つであるから、法我執と人我執の両者は[《俱生》の] 無明なのである。

また、ツォンカパによれば、人我執は法我執より生じるのである。

chos kyi bdag 'dzin de las gang zag gi bdag 'dzin gyi ma rig pa 'byung bas / de las bcu gnyis 'byung bar bshad do // (GR. ma. 89b1-2)

訳) その法我執より、人我執の無明が生じるのであるから、それ(=法我執)より十二縁起が生じると説明されるのである。

- 17) gang zag gi bdag 'gog pa'i rigs pa'i gtso bo ni (108b) 'jug pa las / de ni de nyid du'am 'jig rten de // rnam pa bdun gyis 'grub pa 'gyur min mod kyi // rnam dpayd med par 'jig rten nyid las ni // rang gi yan lag brten nas 'dogs pa yin / zhes shing rta rang gi yan lag dang [1] gcig dang [2] tha dad dang [3] ldan pa dang [4, 5] phan tshun brten pa'i tshul gnyis dang [6] tshogs tsam dang [7] tshogs pa'i byibs te bdun du btsal bas mi rnyed kyang rang gi yan lag la brten nas btags pa'i btags yod du 'jog pa bzhin du gang zag kyang 'jog par gsungs la / de nyid zab mo'i lta ba bde blag tu rnyed pa'i thabs su gsungs pas de'i rigs pa rnams ni gang zag gi bdag 'gog pa'i rigs pa'i gtso bor shes par bya ste / (LNy. pha. 108 a6-b3)

訳) 人我を否定する正理の主なものは、[以下のように説かれている。] MAにおいて「それは、真実或いは世間において七種[のあり方]として成立することは無いけれども、考察されないで、世間としては自らの部分に依って設定されるのである。」というように、車が [1] 自らの部分と同一か、[2] 別異か、[3] [部分を]有するか、[4, 5] 相互に依存する2つのあ

り方、【6】単に「部分が」集積したのみか、或いは【7】集積した形が特定なものかという七「種のあり方」として探し求めても得られないけれども、「車は、」自らの部分に依って構想（＝《施設》）される施設有として設定されるのと同様に、人も設定されると説かれるのである。しかし、真実、即ち深遠な見解を容易に得る方便として説かれたのであるから、その諸々の正理は人我を否定する主要なものと知られるべきである。

尚、この人我の否定に関するより詳細な説明は、下記の箇所を参照されたい。（LR. pa. 441a1-453a2）

- 18) de'i phyir rigs pa rnams kyang bdag gnyis 'gog pa 'du zhing / 'jug pa las de kho na nyid gtan la debs pa'i rigs pa gsungs pa rnams 'grel par bdag med gnyis gtan la (108a) 'bebs par bsdu pa'i skabs su mtha' bzhi'i skye ba 'gog pa'i rigs pa rnams kyis chos kyi bdag med bstan par gsungs shing / sa bcu ba'i mdo las mnyam pa nyid bcus sa drug pa la 'jug par gsungs pa'i chos thams cad skye ba med par mnyam pa nyid kho na rigs pas bstan pas / chos mnyam pa nyid gzhan bstan sla bar dgongs te slob dpon gyis dang por / bdag las ma yin gzhan las min / zhes sogs bkod pa yin zhes gsungs pas chos kyi bdag med sgrub pa'i rigs pa'i gtso bo ni mtha' bzhi'i skye ba 'gog pa'i rigs pa'o // (LN. pha. 107b6-108a3)

訳）それ故に、もろもろの正理も二我（＝人我、法我）を否定するものであり、MAにおいて説かれた真実を決択する諸々の正理「に関して」は、「その」註釈（＝MABh）の二無我を決択することをまとめた箇所、「四辺生を否定する諸々の正理によって法無我を示す」と説かれている。また、『十地経』において「十平等性によって第六地に入る」と説かれた「中の」「一切法は生じることがないことにおける平等性」のみを正理によって示せば、他の「法の平等性」「を理解すること」は容易とお考えになられて、師（＝龍樹）はまず「自らより「も生ぜ」ず、他からより「も生ぜ」ず」云々等々と説かれたのである。故に、法無我を証明する正理の主なものは、四辺生を否定する正理である。

尚、この法我の否定に関するより詳細な説明は、下記の箇所を参照されたい。（LR. pa. 454b6-458a2）

- 19) rigs pas dpyad bzod mi bzod kyi don ni de kho na nyid la dpyod pa'i rigs pa des rnyed ma rnyed yin la ... (LR. pa. 363b3-4)

訳）「正理による考察に耐えるか否か」は、「真実を考察するその正理によって得られるか否か」を意味するが、...

- 20) gzugs la sogs pa'i skye 'gag rnams kyang tha snyad pa'i shes pa 'grub pa yin gyi de dag yod kyang rigs shes kyis mi 'grub pas des ma rnyed pas de dag ji ltar khegs te [/] dper na mig gi shes pas sgra ma rnyed kyang des mi khegs pa bshin no // (LR. pa. 364a1-2)

訳) 色・声等が「生じること」や「滅すること」も言説知によって成立するのである。それら(=色・声等が「生じること」や「滅すること」)は「確かに」存在する。しかし、「それらが」正理知によって成立するわけではないから、[即ち] それ(=正理知)によって得られないからといって、それら(=色・声等が「生じること」や「滅すること」)がどうして否定されよう。たとえば、声は眼識によって得られないけれども、それ(=眼識によって得られない)かみらといって、「声が」否定されないのと同様である。(下線筆者)

- 21) de ltar dpyad pa rigs pa dri ma med pa'i brtag pa'i khur bzod pa mi ' byung bas de daf rigs pas ma rnyed pa na khegs par 'gyur te [/] de dag yod na rigs pa de dag gis rnyed dgos pa'i phyir ro // (LR. pa. 378a3-4)

訳) そのように「正理によって」考察されるもので、《無垢な正理》の考察の重荷に耐えるものは無いのであるから、それらが正理によって得られないならば、「それらは正理による考察によって」否定されるのである。何故ならば、もしそれらが有るならば、それらの正理によって得られるはずであるからである。

- 22) ツォンカパによれば、正理は実体的な存在の考察のみに関与するのであり、言説(=世俗)的なものの考察には全く関与しないのである。

des na rng gi ngos nas bstal ba yul steng du yod pa'i rang gi ngo bos yod pa rigs pas 'gog la yod pa tsam mi 'gog pa ni / rigs pa rnams rang bzhin tshol ba lhur byed par gsungs pas

訳) それ故に、自らの側から「存在するか否か」考察されるもの、即ち対象の上に「措定された」自体によって存在するものは、正理によって否定されるが、単に存在するもの(=《唯有》)は、「正理によって」否定されないことは、『四百論細註』(*Catuhśataka-tīkā*, 略号 CŚt)において「正理は自性を探ることに専念するものである。」と説かれているからである。故に、.....

cf. CŚt. D. ya. 201b1-4. 参照。

- 23) des na rang gi ngo bos grub pa'i rang bzhin med na gzhan ci zhig yod ces smra ba 'dis ni gdon mi za bar myu gu rang bzhin med pa dang myu gu med pa gnyis kyi khyad par ma phyed par gsal la de'i phyir myu gu yod pa dang myu (356a) gu rang gi ngo bos grub pa gnyis kyang mi phyed pas yod pa na rang gi ngo bos yod pa dang / rang gi ngo bos grub pa med na med par 'dod par gsal te / de ltar ma yin na rang gi ngo bos grub pa 'gog pa'i rigs pas yod tsam dang skye ba dang 'gag pa tsam sogs pa ci'i phyir 'gegs par smra / (LR. pa. 355b6-356a2)

訳) それ故に、「自体によって成立する自性がないならば、他の何が有ろうか。」と説く者は、「芽が無自性であること」と「芽が無いこと」の二つを

全く区別できないことは明らかである。また、それ故に、彼は「芽が有ること」と「芽が自体によって有ること」の二つをも区別〔でき〕ないのであるから、「あるものが有るならば、〔それは〕自体によって有るのであり、〔あるものが〕自体によって無い（＝非存在）のであれば、〔それは全く〕無いのである。」と主張していることも明らかである。そうでなければ、自体によって成立するものを否定する正理によって《唯有》や《唯生》、《唯滅》等をどうして否定すると語るであろうか。

- 24) 《唯有》に関しては、Williams [1979] 参照。
 25) LRにおいてはこの《言説有》が成立する以下のような三つの条件が提示されている。(LR. pa. 376b5-6)

- 1) 言説知に広く知られているもの（＝《極成》なもの）である。(tha snyad pa'i shes pa la grags pa yin pa)
- 2) 他の言説知（＝量）によって損なわれない。(ji ltar grags pa'i don de la tha snyad pa'i tshad ma gzhan gyis gnod pa med pa)
- 3) 正理知によって損なわれない (de kho na nyid la'am rang bzhin yod med tshul bzhin du dpyod pa'i rigs pas gnod pa mi 'bab pa zhig)

LRにおけるこの羅列的な条件づけに対して、LNでツォンカパが示した《言説有》の三条件は、ツォンカパの論理的な意図がより明確に読み取れる。(LN. pha. 111b1-2)

- 1) 正理知によっては得られない (rigs shes kyis ji ltar yod btsal bas mi rnyed)
- 2) 正理知という量によって損なわれない (rigs shes tshad ma kyis mi gnod pa)
- 3) 他の言説量によっても損なわれない (tha snyad pa'i tshad ma gzhan gang gis kyang mi gnod pa)

「正理知によっては得られないもの」には、仏教内外の实在論者等によって措定される「正理によって否定される（＝損なわれる）もの」とそれによって否定されない「言説的なもの」がある。それ故に、まず前者から後者を区別するために「正理知という量によって損なわれない」という条件が付される。次に、「正理知という量によって損なわれないもの」、即ち「言説的なもの」には《言説有》と、通常の言説知によって誤りとされる（＝損なわれる）蜃気楼における水のような《言説無》がある。従って、後者より前者を区別するために「他の言説量によっても損なわれない」という条件が付されると考えられる。

ツォンカパにおける《言説有》に関しては、松本 [1984] 参照。

- 26) dir myu gu la sogs pa rang bzhin med pa de rigs shes kyis grub na mthar thug dpyod pa'i rigs pas dpyad bzod du 'gyur bar mthong nas kha cig bden dngos med pa bden par grub ces smra la / (RG. ba. 28a5)

訳) これに対して、[対論者達は、]「芽等が自性を有しないことそれが、正理知によって成立するならば、究極 (mthar thug, =勝義) を考察する正理による考察に耐えることとなるであろう。」と見る。そして、[その対論者の中の] ある者は、「真実 [として] 事物が存在しないこと (bden dngos med, =諸存在の無自性性) が、真実として成立する (bden par grub pa) 。」と語るのである。しかし、.....

- 27) sngar myu gu la sogs pa bden par yod dam med btsal ba'i 'og tu bden med rigs shes kyis rnyed pas slar bden med bden par yod dam med btsal ba'i tshe bden med mi rnyed kyang de ma rnyed par mi 'gyur la / sngar myu gu la sogs pa mthar thug dpyod pa'i rigs pas dpyad bzod du yod med btsal ba'i tshe yang dpyad bzod ma rnyed la slar dpyad bzod (29a) du med pa de nyid dpyad bzod du yod med btsal ba'i tshe yang de nyid mi rnyed pas rigs shes kyis rnyed pa dang des dpyad bzod gnyis kyang mi mtshungs so // (RG. ba. 28b5-29a1)
- 27) ツォンカパにおけるこのような「自性の否定」と「無自性の肯定」に関しては、拙稿 [1998] を参照されたい。
- 28) これに関しては、次の研究を参照されたい。吉水 [1990], [1991], [1996], Newland [1992], 並びに Tauscher [1995].

(略号表)

- CŚt: *Bodhisattva-yogācāra-catuhṣataka-ṭīkā*, D. ed. dBu ma. vol. 8. 1978, Tokyo.
- D: D dGe ed. published Sekai Seiten Kankō Kai.
- GR: *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bshad pa dGongs pa rab gsal*, bKra shis lhung po ed. (The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, vol. 24), Delhi, 1979.
- LN: *Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos Legs bshad snying po*, bKra shis lhung po ed. (The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, vol. 21), Delhi, 1979.
- LR: *Byang chub lam rim chen mo*, bKra shis lhung po ed. (The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, vol. 20), Delhi, 1979.
- MA: *Madhyamakāvatāra*. (→ MABh)
- MABh: *Madhyamakāvatāra-bhāṣya*, ed. by de la Vallée Poussin, *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti* (Bibliotheca Buddhica, 9), Osnabrück, 1970. (reprint)
- PRP: *Prasannapadā Mūlamadhyamaka-vṛtti*, ed. by de la Vallée Poussin, *Mūlamadhyamakakārikas de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti* (Bibliotheca Buddhica, 4), Osnabrück, 1970.

(reprint)

RG: *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa shes rab ces bya ba'i rnam bshad rigs pa'i rgya mtsho*, bKra shis lhung po ed. (The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, vol. 23), Delhi, 1979.

引用及び参考文献

江島 恵教

1980：中観思想の展開 — Bhāvaviveka研究一、春秋社、東京。

松本 史郎。

1981：ツォンカパの中観思想について、『東洋学報』、第62巻、第3・4号、pp. 174-211.

1984：Tsong kha pa の中観思想に関する考察、日本西藏学会会報、第30号、pp. 4-6.

御牧 克己（森山 清徹、苫米 地等流）

1966：大乘仏典（中国・日本編）15 ツォンカパ、中央公論社、東京。

森山 清徹

1994：ツォンカパの無我、無明論 — スヴァータントリカ及び瑜伽行中観派批判一、佛教論叢、第38号、pp. 21-29.

長尾 雅人

1954：西藏仏教研究、岩波書店、東京。

1978：中観と唯識、岩波書店、東京。

Elizabeth Napper

1989：Dependent Arising and Emptiness: A Tibetan Buddhist Interpretation of Madhyamika Philosophy Emphasizing the Compatibility of Emptiness and Conventional Phenomena. Wisdom Publications. London.

Guy Newland

1992：The Two Truths - in the Madhyamika Philosophy of the Ge-luk-ba Order of Tibetan Buddhism. Snow Lion Publications. Ithaca. New York.

小川 一乗

1976：空性思想の研究 - 『入中論の研究』 -、文栄堂、京都。

1988：空性思想の研究Ⅱ - ツォンカパ造『意趣善明』 - 第六章の和訳、文栄堂、

京都.

1988 : 「所知障」に関するノート（一）、（二）、国訳一切経印度撰述部月報『三蔵集』、pp. 143-158, 大東出版、東京.

Paul M. Williams.

1979 : Tsong kha pa on kun rzob bden pa, Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson, Oxford.

白館 戒雲 (Tshultrim Kelsang Khangkar)

1995 : ツォンカパ 中観哲学の研究 I (高田 順仁との共訳)

Hermut Tauscher

1995 : Die Lehre von den Zwei Wirklichkeiten in Tsong kha pas Madhyamaka-werken, Wiener Studien Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 36. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

吉水 千鶴子

1990 : ツォンカパの『入中論』註釈における二諦をめぐる議論 I. 世俗諦をめぐる議論、『成田山仏教研究所』13号、pp. 105-149.

1991 : ツォンカパの『入中論』註釈における二諦をめぐる議論 II. 勝義諦をめぐる議論、『伊原照蓮古希記念論文集』、pp. 135-152.

1996 : Die Erkenntnislehre des Prāsaṅgika-Madhyamaka nach dem Tshig gsal ston thun gyi tshad ma'i mam bśad des 'Jam dByaṅs bžad pa'i rdo rje, Einleitung, Textanalyse, Übersetzung. Heft 37. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

四津谷 孝道

1987 : ツォンカパの無自性理解 — 正理知による無自性理解の諸相 —、駒澤大学大学院仏教学研究年報、第20号、pp. 96-79.

1998 : ツォンカパにおける無自性論証と純粹否定、仏典文化研究論集、第1号.